

かたりべ 79

豊島区立郷土資料館だより

『姑獲鳥の夏』

「うぶめ」のイメージ

今夏、京極夏彦氏のデビュー作である小説『姑獲鳥の夏』が映画化、上映されました。物語の舞台となったのは、雑司ヶ谷鬼子母神堂近くの久遠寺医院という病院です。院長の娘が妊娠二十ヶ月であるという噂が発端となって物語が展開します。もちろんフィクションですので、久遠寺医院は実在しませんし、そのような事件が起こったという史実もありません。しかしながら映画でも紹介されていた図1のような「うぶめ」という化物、一般にはお産が原因で死亡した女性の幽霊とされていますが、そのイメージは実際に伝えられてきたものです。今回はその姿を文献・絵画資料によって追っていききたいと思います。（次頁に続く）



図1 鳥山石燕『画図百鬼夜行』
前篇 陽「姑獲鳥（うぶめ）」江戸時代・安永五（1776）年刊

映画の中でも言及されていた「和漢三才図会」は、江戸時代中期に刊行された挿図付きの百科事典です。ここでは鳥類として「姑獲鳥(うぶめどり)」という鳥が掲載されており、その挿図をみると「ごく普通の鳥の姿が描かれています(図2)。」

しかしながら、本文を読むと「これは鬼神の類である。人間の魂魄を宿し、毛をまとっているときは空を飛び鳥となり、毛を脱ぐと人間の女性となる。これは産婦が死んだ後に化す姿である。それゆえ、胸の前には両乳があり、喜んで人の子を取って養いみずからの子とする。小さな子供のいる家では夜に衣類を外に干してはいけない、なぜならばこの鳥が夜飛んできて血で点をつけて印をつけると、

その家の子供はたちまちに病氣となってしまうからだ。」という中国の文献にみられる話を伝えている。それに続いて「思うに姑獲鳥、俗にいう産女(うぶめ)は産後に死んだ婦人が化けたものである。わが国にては西国の海浜に多く出没するが、これは別の種ではないだろうか。九州の人がいうには、小雨の降る闇夜にその姿を現し、必ずその場には鬼火がともっているという。その姿や鳴き声はカモメに似ている。よく婦人の姿にまじり、子を携えていて、人に遭うと子を背負ってくれという。怖がって逃げるとはなはだしく悪寒がして発熱し、死に至ることがある。強剛の者が願いを聞き入れて子を背負ってみると、人家に近づくにつれて



図2 寺島良安「和漢三才図会」巻第四十四・山禽類「姑獲鳥(うぶめどり)」江戸時代・正徳〜享保(1711~1736)年間



図3 『百怪図巻』「うぶめ」福岡市博物館蔵 江戸時代

背中が軽くなり、ついにはなにも無くなっているという。畿内やその近隣ではこのような狐狸のしわざでもない話は聞いたことがない。」と当時の見聞を記している。中国では人の子をさらう、あるいは人の子を病氣にしてみよう、という害のある化物であったのが、日本では子を背負ってくれと頼むだけで、拒否しない限りにおいては特に害は無い化物としてここでも紹介されています。

ところで、他の文献では、血に染まった腰巻をまとい、赤子を抱いて現れ、通りがかった人に赤子を抱いて欲しい、と言って追いかけてきたりするという話も伝わっています。また、赤子を抱いたとたん、赤子と思っていたのが実は墓石で、

それに抱きついていて、という話や、抱いた赤子が石のようにどんどん重くなっていき、最後はへたばってしまった、という話もあります。図3はこの下半身血まみれの「うぶめ」のイメージが描かれています。

明治四十四年、雑司ヶ谷に移り住んだ森岩雄氏は以下のようにその様子を記しています。「秋雨のながく続く頃にはよく燐が燃えるといって、鬼火がお寺に見られて、怖ろしい思いをしたことがあった。秋になると、鼻が毎晩のように啼き、あたりは真闇であった。」(大正・雑司ヶ谷)かつての雑司ヶ谷は今では想像もつかないほど暗闇が多かったようです。また安産・子育ての神、雑司ヶ谷鬼子母神は、かつては人の子をさらって喰う鬼女であった、といういわれもまた一役かっているようです。

＊本欄は以下の文献を参照、図版の転載をさせていただきます。
『和漢三才図会』東京美術、一九八三年
『鳥山石燕 画図百鬼夜行』国書刊行会、一九九二年
『妖怪図巻』国書刊行会、二〇〇〇年

(藤岡)

“石はまちのなかで生きている——石質や石工名を見てみよう——”

梅雨空を気にしながらのフィールドワークでしたが、お天気にも恵まれ、地域の歴史を知る新しい発見もありました。六月三〇日（木）、午後六時三〇分から八時まではそのための事前学習（講師は当館学芸員福岡直子）をし、七月二日（土）の午後二時から四時の実施に備えました。当日は日本石仏協会常任理事の小松光衛氏に、各所の見どころを石質・石工いしくのこ

とをまじえながらやさしく、そして詳しい解説をしていただきました。

井橋の端から眺めました。赤茶けた四角形の石が城の石積みのように積まれています。この部分は、山手線開削当初の石積みで、現在、五箇所ほど残されているという事です。使用されている石は、小松石こまついしといえます。また、石積みの工法は、セメントなどの接合剤を用いない空積みからづみです。開削後に修復した要塞の部分とは一見して違いがわかります。この石積みの方法は、優れた工法です。

◆コース沿いの“石の顔”

駒込社会教育会館に集合。最初は、駒込駅北口の区立染井吉野記念公園内に移築保存されている「旧駒込橋の高欄」を見学。山手線の貨物（複線）の建設に伴い、一九二三（大正一二）年に架け替えられたもので、目白駅の学習院大学側に移築保存されているものと兄弟といわれています。続いて駒込橋を渡り、文京区本駒込六丁目の個人宅の前を通りました。塀には大谷石おおやいしが使われ、石質の風合いと意匠的な工夫が人目をひきつけました。

次は山手線の擁壁です。その一部を染

二三名の一行は、染井通りを靈園へ向かいました。この付近は、江戸の切絵図きりえずによく描かれている部分で、当時と同じと思われる道をたどれますが、近年では道の両側に高層建物が建てられ、その壁面には、アフリカ・イタリア等外国の石材が使用されていることがわかりました。道沿いの区立そめいよしの児童遊園の入口には、公園名が彫られた石が据えられてあります。桃色をしている点に特徴がある、岡山県で産出される万成石まんなりいしという花崗岩かこうがんの石です。桜の季節、訪ねたときにも、もう一度見てみましょう。靈園正門の手前には、十二地蔵（六体の地

蔵が二段）があり、地藏の光背や蓮座の部分に江戸時代の石工の技を感じました。

◆霊園・寺院は石の宝庫

染井霊園には墓石とともに、墓碑や顕彰碑があります。霊園は、一九七四（明治七）年に開かれましたが、その開拓に当たった「山田文応」という人物の事蹟を伝える記念碑が正門近くにあります。石質は粘板岩ねんばんがんの井内石いないしで、石名は井内という集落（宮城県旧稲井村）から採掘されたことに由来します。刻字から、明治四四年に建立されたことがわかりますが、石工の名前は見当たりませんでした。



標柱左側の石碑が「染井墓地開設功勞者山田文
応顕彰碑」。近年、説明板が設置された。

現在では、文字も機械で彫ることが普通なのですが、かつては石工が専用の道具で彫っていました。江戸・東京の著名な字彫り職人の名前が刻まれている石



染井霊園1種口1号4側にある「小河一敏記念碑」。石工名は、講師が指さす部分（写真左上：井亀泉刻）にある。

セピア色の記憶

第14回

雑司が谷鬼子母神周辺のにぎわい

左に示した二枚の写真は、雑司が谷三丁目一五番に所在する雑司が谷鬼子母神境内の様子です。上の写真は一九六二年一月一七日（高木進一氏撮影）に、また下の写真は二〇〇五年八月に撮影しています。

子授け・安産・子育ての神として知られる雑司が谷鬼子母神は、縁日である八の日や、一〇月のお会式の際には、多くの参詣客や見物客で賑わいます。ことに

一〇月一六日から一八日までのお会式期間中は、上の写真に見られるように、わた飴、ヨーヨー釣りといった出店が境内に軒を連ね、たくさんの方が繰り出します。そもそも「お会式」とは、日蓮の忌日（一〇月一三日）前後に催される日蓮宗の法会であり、現在では、期間中の夜間、四〇あまりの講が独自の万燈を作つて、太鼓や鉦を打ち鳴らしながら練り歩く光景が見られます。

さて、写真正面の鬼子母神堂は、寛文四年（一六六四）に建造された区内で最古の歴史的建造物（都指定文化財）です。一六世紀後半、この付近には、まだ二、三軒の人家しかなかったようですが、信仰の拡大とともに、参詣客が訪れるようになります。そして、一八世紀半ばには人家や商家が立ち並び、延享二年（一七四五）には、雑司が谷鬼子母神門前として江戸の町方に組み込まれていきました。



下段に掲げた絵は、江戸の名所案内のひとつである『江戸名所図会』（天保五〜七年成立）に描かれた鬼子母神界隈（右側）と付近の商店（左側）の様子です。右の挿絵には、鬼子母神堂はもちろん、クランク状に曲がる参道、参道両側のケヤキ並木などが確認できます。そして、法明寺へ続く道の様子や、鬼子母神堂の北東側を当時流れていた弦巻川なども描かれ、周辺の景観にも興味をひかれます。また、左側の挿絵には、鬼子母神参詣土産として知られていた風車や麦藁細工の角兵衛獅子、すすきみみずくが、茶屋の店頭で販売される様子が描かれています。

雑司が谷鬼子母神周辺の賑わいは、単に子授け・安産・子育ての祈願を目的にする人のみならず、江戸中心部から近距離にあることや、有名な土産物や料理屋があり、多くの人々が気軽に訪れることができたことに起因しています。（秋山）



豊島区域の絵図から始まる時の旅

「雑司谷村絵図」編

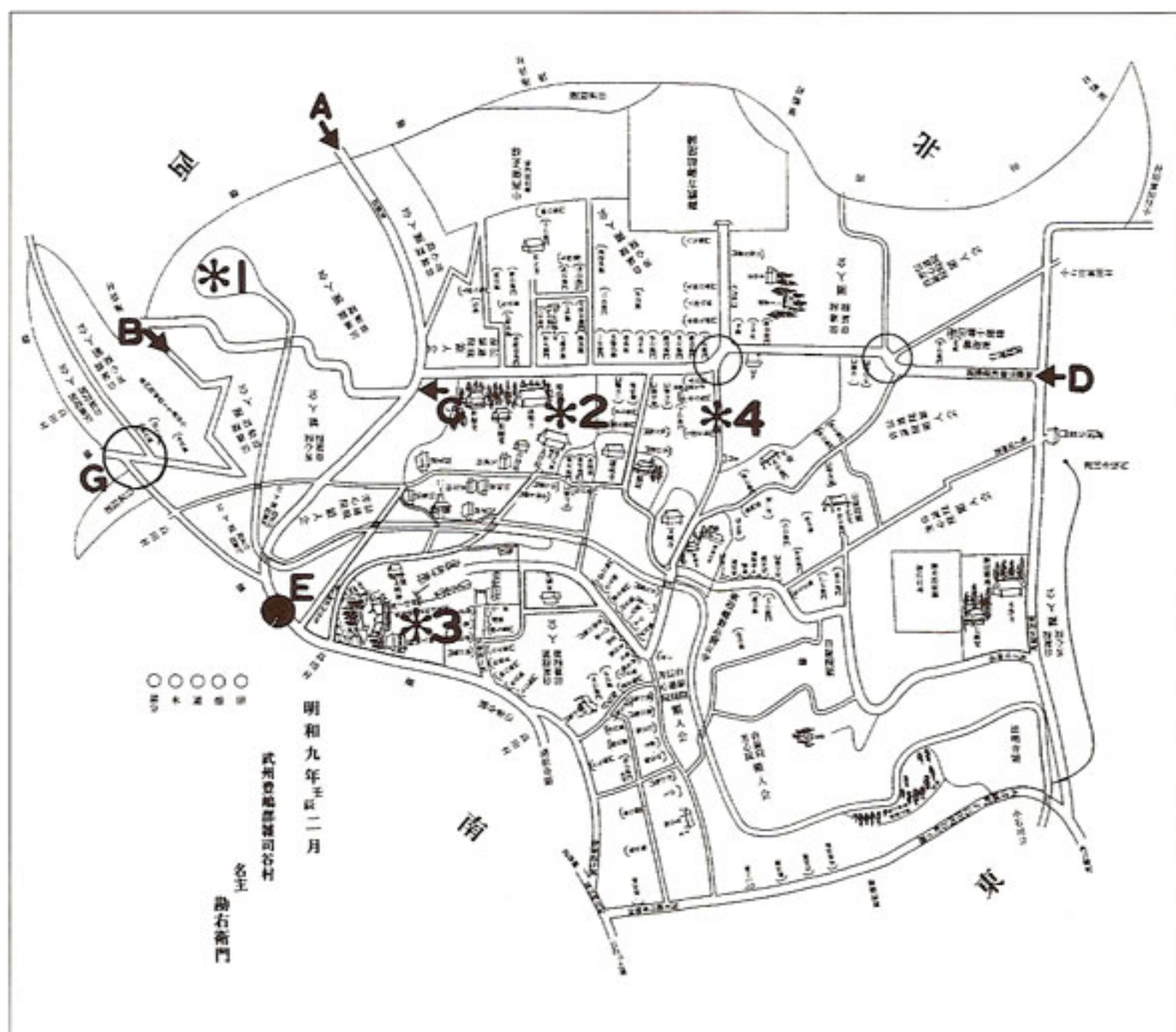
ふだん、通勤・通学・買い物・散歩などで何げなく歩いている道。アスファルト舗装され、横断歩道や路側帯の白線がひかれた道は、まさに「道路」という呼称にふさわしく、過去との断絶を象徴しているかのようです。しかし、これらの舗装道路の中には、道幅こそ変わっていますが、江戸時代の絵図に描かれた道が、ほぼ位置を変えずに、現在の生活道路となっているものも少なくありません。

そこで、今回は豊島区域の村絵図のひとつである「雑司谷村絵図」(明和九(一七七二)年に描かれた道を現在の道路に比定してみたいと思います。

村絵図に見えるランドマークですが、*1が丸池(現在の西池袋一九一五付近)で、そこから下に伸びているのが弦巻川です。*2は法明寺。*3は鬼子母神。そして*4は雑司ヶ谷霊園に比定される区域です。

そうすると、Dの道は雑司ヶ谷霊園の北側を東西に走る道であると推定できます。○で囲んだ角の形は現在もほ

ほとんど同じです。そこからつながって



法明寺の北側を通る道は現在の「東通り」ということになるでしょう。その道とCの矢印で交わるAの道は、現在の明治通りにあたります。現在は●Eの位置から南に延びて千登世橋へと向

かいますが、本来は鬼子母神の参道につながっていました。

さて、Cの道は現在のどこかの道に該当するのでしょうか。東通り明治通りとほぼ交差して西に延びる道ですからビックリガードの道ということになりますが、もちろん、この通りは一九六三(昭和三八)年に新しく出来た道路です。では、この道は無くなってしまったのでしょうか。絵図ではこの近辺はかなり重められて描かれているので確かかなことは言えませんが、江戸時代の他の絵図などを見比べてみると、どうやら郷土資料館(勤労福祉会館)南側の道に当たるようです。そうするとその道から分かれて南に延びる道(B)は、自由学園・婦人の友社の東側を通過して山手線とほぼ並行して南下して、長崎道路切(通称「開かずの踏切」)と交差する道に比定することができます(G)。このように、江戸時代からの道に比定できる道路は、都市化して区画整理が進んだ豊島区内といえども、意外に多いのです。ですから、地図(一万分の一地形図がおすすめです)と江戸時代の絵図を見比べてみると、「えっ、この道古いの?」と、思わぬ発見があるかも知れません。

(いとう)

郷土資料館からのお知らせ

郷土資料館後期事業予定

― 展 示 ―

◆第2回企画展 1月25日(水)～3月12日(日)(仮称)「ぞうしがや」

*展示準備のため1月15日(日)～24日

(火)まで展示室は休館です。それまでは、コーナー展示(ちよっとむかしの家電製品・豊島のものづくり(組紐)・むかしのくらし・東京空襲60年(第1回企画展の一部)と常設展示を開催しています。

― 煙 蒸 ―

◆資料をカビや虫害から守るために実施するもので、11月下旬～12月初旬の頃、休館することがあります。

― 講 座 ―

◆地域史講座「わかる豊島区3」

〔後期講座4回〕資料で豊島区を斬る

①11月19日 文献資料で豊島区を斬る

②12月17日 絵画資料で豊島区を斬る

③1月28日 民俗資料で豊島区を斬る

④2月25日 考古資料で豊島区を斬る

*毎土曜日午後2～4時。10月20日の広報としまで募集。◆歴史講座「戦地からの書簡を読む」三月に3回(予定)

入館者の声から

★展示や郷土資料館の事業について、入館票やアンケート用紙に記入していただき、貴重なご意見をいただいています。また、電話や手紙等でもご意見をいただきます。ここでは、全体としてどのような内容のものが多くか、その一端をご紹介します。

まず、①展示してある資料に感動した。②もっと大きな展示室であればよいのに。③文字にフリガナがないので読めなかった。④昔、区内に住んでいたのとてなつかしい。⑤今度は、自分の希望の展示をして欲しい。(例えば江戸時代の豊島区とか発掘資料の展示など)⑥昔、私が寄贈した資料が展示してないが、どうしたのか。等々あります。

多くの方々から寄贈していただいたものを、すぐに展示したいとは思っていますが、かなえられずにいます。また、当館の所在地を区民の方が御存じないということもよくあり、「池袋消防署の隣とか勤福の七階」とお話すると承知される：宣伝不足を感じています。

*講座の開催内容・応募等は、当館へ直接お問い合わせ下さい。また、「広報としま」ホームページをご覧ください。

資料を探しています！

資料館へはさまざまな資料が寄贈されています。その年によって件数はいろいろですが、いずれも区の歴史・文化を伝える貴重なものとして資料館の収蔵庫で保管しています。そして、企画展などでも展示しています。また、企画展のときには、テーマや内容に見合った資料を、積極的に収集あるいは借用することもあります。区内の個人の方からの場合もありますし、また、よその区の博物館からということもあります。

今回は、次のような写真をお持ちかどうかおたずねします。お持ちの方は、資料館へご連絡ください。よろしければ古い写真をカメラで撮影し、そしてパネル化して、展示のときに掲示したいと思えます。昭和40年代くらいまでの区内の写真で、店の商いの様子がかかるもの。八百屋、酒屋、菓子屋、下駄屋、魚屋、食料品屋薪炭屋、市場等。その他に、職人さん(桶樽・大工・石屋・畳・看板)、この他珍しい店構えや職人さんの登場も歓迎します。

「古いアルバム」を開いてみて下さい。

編集後記

今年も、夏休みの宿題のために小・中・高・大の学生さんが来館しました。親御さんと一緒の場合もありました。しかし、なかには宿題をする本人ではなく、親御さんが電話や窓口で子どもの宿題の相談をしたり資料を探すということがありました。これは、ここ数年の傾向です。どなたが来館してもこちらでは適切な対応に努めているつもりですが、適当な参考資料かどうか迷うこともあり、やはり宿題をするご本人に来館してもらいたいと思っています。

学生にとって資料館は宿題を片付けるための存在でしかないのでしょうか。蒸し暑さが増すとともに悲しくもありました。

(ふく)

かたりべ

No.79

2005年9月1日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351

<http://www.museum.toshima.tokyo.jp>